

短 報

重度聴覚障害老人の終末期と死に関する意識調査

佐久川 肇^{*1} 谷中恭子^{*2}

要 約

男性5人、女性10人、計15人の52歳-75歳（平均65.1歳）の重度聴覚障害者に手話による聞き取りを含むアンケート調査を行い、以下の結果を得た。

(1) 回答した10人中、死に際して肉体的な苦痛に不安を感じると答えた者はいなかった。他方で4人が自分自身よりも残された家族や友人に対して不安を感じると答えた。

(2) 植物状態になった時の対処法について9人が回答したが、そのうち4人は聴覚障害の治療法に対する医学の研究のための献体を希望した。

(3) 死に対する不安の具体例としては、6人が親しい人と対話することができないまま死ぬことの不安を訴え、孤独であると感じると答えた。

全体として、対象者は親しい者との対話が充分に出来ないことに孤独感と不安感を強く感じ、健聴者とのコミュニケーションを強く望んでいた。そして終末期については、自分自身のことよりも、家族や友人を憂慮し、聴覚障害者全体の福利を考える謙虚で真摯な態度が伺われた。

研究目的

聴覚障害を持った高齢者（以下聴覚障害老人と略す）は、本来の障害による聞き取りにくさに加えて、老化による聴力の低下を併せ持っている。彼らは健聴者との交流は極めて乏しく、独特の精神生活を営んでいると考えられるため、正常の聴覚を持つ老人との間には、自らの死に対する考え方に相違があると推測されるが、聴覚障害や高齢のため、アンケート調査のみでこれを知るのは困難であり、手話による聞き取りが必要である。

彼らの死に対する意識の特徴を知るために、著者の一人は岡山市が主催する聴覚障害者と健聴者が交流する手話サークルの定例会に参加し、手話で交流しながら意見を交わし、15人の聴覚障害者に対して、自らの死に対する考え方についてアンケート調査を行った。調査期間は平成7年4月から9月である。

調査対象

対象者は男性5人、女性10人、計15人で、その年齢は52歳から75歳に及ぶ（平均65.1歳）（図1）。

聴覚を喪失した時期については、1人を除き全員が20歳前に聴覚を失っている（表1）。

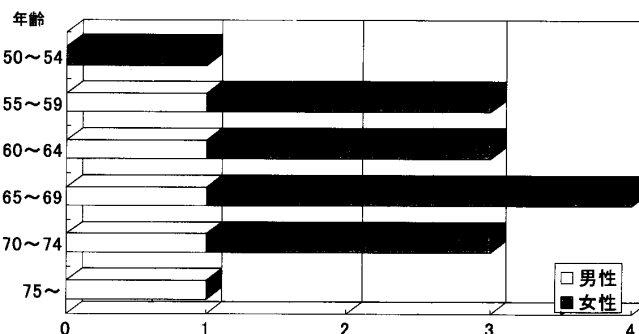


図1 対象者の年齢（平均年齢65.1歳）

表1 対象者が聴力を喪失した時期

年 齢	人 数
0～1	4
1～9	6
10～19	1
50～59	1
無回答	3

聴覚障害の程度については、ほぼ全員が重度聴覚障害（聾）である（表2）。

表2 対象者の“きこえ”の程度

“きこえ”の程度			人数
少しは聞こえる	(補装具 あり)		4
〃	(〃 なし)		1
あまり聞こえない	(補装具 あり)		4
〃	(〃 なし)		4
全然聞こえない	(補装具 なし)		10

表3 対象者の現在または以前の職業

職 種	人数
主 婦	5
会社員(男)	2
〃 (女)	1
農 業(男)	1
歯科技士(男)	1
料理補助(女)	1
洋 裁(女)	1
無職／無回答(男)	1
〃 (女)	2

対象者の現在及び過去の職業については、主婦に次いで会社員が多い(表3)。

調 査 結 果

調査結果は以下の通りである。

1. 「自分自身の死に対する不安」について(表4)。

回答した10人中4人(40%)が自分自身の不安よりむしろ、死後に残された家族や友人がどうなるのか、その衝撃を気にすると答えた。また、死に際しての肉体的な苦痛について不安を示す者は1人もいなかった。

2. 「終末期の選び方」について。

1人を除く14人から回答が得られた。具体的なイメージを伴い、かつ重大な問題と考えられる場合には回答率が高い印象を見られた。

- (1) ホスピスケアをうけられる：5人(33%)
- (2) 在宅死を希望する：4人(27%)
- (3) 医療による延命措置を行わずに自然死を望む：3人(20%)
- (4) 医療による延命措置を受ける：2人(13%)

3. 「“植物状態”になった時の処置法」について

6人(33%)は無回答であった。

表4 “自分の死”に対する不安について

不安の内容	人数
(1)「どのような原因(老衰や病気や事故など)で自分は死ぬのか」ということ	2
(2)「自分が死ぬときに、肉体的苦痛はないか」ということ	0
(3)「自分が死んだ後、残された家族や友人はどうなるのか」ということ	4
(4)「自分が死んだ後、自分の魂はどこへ行くのか」ということ	3
(5)その他	5
(6)無回答	5

- (1) 医学の発展のため、特に聴覚障害の治療に貢献するために献体をしたい：4人(27%)
- (2) 自然死を望む：3人(20%)
- (3) 長く生きて欲しいと願う家族や友人のために、医療による延命を希望する：2人(13%)

4. 以下は「聴覚障害を持つがゆえの”死”に対する不安」の具体例である。

- (1) 親しい人々と十分なコミュニケーションができないまま、気持ちを理解されず、孤独のまま死ぬこと：4人(27%)
- (2) 関節炎等の手や腕の病気のために、手話や筆談等の気持ちや苦痛を表現するための能力を失うこと：1人
- (3) 手話がわかる職員がいる病院で、安心して終末期医療を受け、過ごしていけるかどうかかわからない：1人

5. “人生における生き甲斐”についての質問に対して、対象者の64%が「手話の普及」と答えた。

考 察

一般に、障害をもつ人々には健常者よりも生活に困難が続きまとう。そして、老年になるにつれて、健常者よりも死と終末期に関する不安が強いと考えられる。しかしながらこの調査から以下のことが明らかになった。

- (1) 対象となった聴覚障害者の中では、死に際しての肉体的な苦痛を憂慮する者はいなかった。他方で、4人が自分自身よりも残された家族や友人に関して不安を感じていた。
- (2) 4人が死後に彼らの遺体を、聴覚障害の医学研究のために献体することを希望した。
- (3) 6人が親しい人々と対話することができないまま、孤独のうちに死ぬことの不安を訴えていた。
- (4) 対象者の大半は手話を普及することによって、

健常者と容易にコミュニケーションができるようになることを強く望んでいた。

この調査結果から聴覚障害老人が一般の老人とはかなり異なった死生観を持つことが伺われた。この交流会に参加した対象者は健聴者との交流を強く望む積極的な人々であり、必ずしも一般的な聴覚障害老人を代表するものではないが、その孤独感と健聴者とのコミュニケーションに対する不安全感は聴覚障

害老人の特徴の一端を表しているものと推測できる。彼らの生と死に対する畏敬の感情と真摯な態度はおそらく彼らが長年の間障害と対峙することによって培ってきたものであり、障害を持つ者のみが達しうる深い境地を我々に示していると考えられる。今後同年代の健聴者と比較研究することによって、聴覚障害老人の死生観の深層を究明し、コミュニケーションが閉ざされる意味を究明したい。

(平成11年11月10日受理)

A Survey of the Elderly People with Severely Hearing Impairment Concerning their Terminal Phase Life

Hajime SAKUGAWA and Kyoko TANINAKA

(Accepted Nov. 10, 1999)

Key words : THE AGED WITH HEARING IMPAIRMENT, THE TERMINAL PHASE LIFE

Abstract

In order to clarify the characteristics of the thoughts of aged people with hearing impairment, a questionnaire investigation concerning their thoughts about death was conducted on 15 severely hearing impaired. Some parts of questionnaire were conducted by sign language. Following facts were revealed.

- (1) None of the subjects was concerned about their physical suffering when faced with death. On the other hand, 4 subjects were more anxious about their families and friends than themselves.
- (2) 4 subjects wanted to donate their bodies to medical research for treatment of hearing impairment.
- (3) 6 subjects replied that they feel lonely and anxious about dying without being able to communicate with people close to them.
- (4) Many subjects strongly wished to communicate more easily with normal people by popularizing the use of sign language.

In general, the subjects expressed their concerns about the welfare to have humanity which care about total welfare of people with hearing impairment than themselves.

Correspondence to : Hajime SAKUGAWA Department of Medical Social Work, Faculty of Medical Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
(Kawasaki Journal of Medical Welfare Vol.9, No.2, 1999 257-259)